

真の平和を願って

県立開邦高等学校 二年
神山 実穂

「戦争を体験したくない。」それは誰しもが願うことではないだろうか。私はここ沖縄に生まれ、幼い頃から多くの戦争体験者の話を聴いてきた。沖縄戦や、原爆が投下された広島、長崎についての絵本も読んだし、沖縄戦の実際のフィルムを残してきた「一フット運動の会」の映像も見たことがある。そうやって戦争に触れるたびに思う。戦争は何一つ良いことを残さない。自然も人も全てを焼き尽くし、人は人でなくなっただかのように憎しみ合い、血にまみれ、殺し合う。大切なものや当たり前だったものが皆、失われてしまう。

今、憲法改正問題が世間を騒がせている。高校生の忙しさにかまけてあまり新聞を読んでいなかったが、先日久しぶりに地元紙をめぐった。すると、辺野古基地移設と共に、憲法改正への動きが着々と進められている様子を伝える記事が、所狭しと並んでいたのだ。「このままでは戦争が起こってしまうのではないか。」不安にかられ、私は憲法改正について調べることにした。

内閣により集団的自衛権の行使を可能にする動きが進められている中で、「抑止力」という言葉をよく耳にする。物事を抑えつける力。軍隊の存在が戦争においてのそれである。強い軍隊があれば、相手国はリスクを恐れて攻撃してこない。集団的自衛権の行使は、他の国と協力することで抑止力を強化することができ、それによつて我が国の平和は保たれる。集団的自衛権の行使に肯定的な立場からすると、平和を守るために抑止力は必要なものである。

しかし、ここで私は大きな疑問を感じた。それは本当の意味での平和なのだろうか。

確かにこの地球では、抑止力によつて戦争を妨げている部分もあるかもしれない。だがそれは、武器や軍隊を保有しながら「やられたらやり返しますよ。」と言っているようなものだ。私には戦争へのやる気に満ち溢れているようにしか思えない。

ましてやその考えは、抑止力を使つて自国を優先させた安全を守ろうとしていることになるのではないか。他国と本当に平和な関係を持つとうとしない。武器を捨てて繋がりとうとしない。「自分の国だけが平和であれば良い。」なんて臆

病で自己満足な平和なのだろう。

「抑止力」にも限界があるのではないだろうか。人間は過ちを犯す、好戦的な動物だ。歴史がそれを物語っている。かつて日本は軍隊が政府を支配し、武力を暴走させた。武力を抑えることはできなかった。私たちは今、あの過ちを同じ人間として犯すことのないように、歴史を学んでいるのではないだろうか。

武器を捨てるのは怖いことだが、本当の平和の意味を見失ってはならない。平和には、武力も抑止力も必要ない。それらで守られるものでもない。国籍など関係なく、世界中皆が手を取り合うものだ。今必要なのは、本当の平和の意味を一人一人が考え、そして意見を交換しあうことなのだ。武器を捨て、偏見を捨て、言葉を交わしあううちに、真の平和へ近づいていくのではないだろうか。

今回憲法について調べたことで、私は知ることの大切さを感じた。そして同時に、知らないことへの怖さも感じた。憲法改正案が議論される中、そのことについて無関心だったり、よく理解していない若者たちも多いようだ。それでいて、自分の心になんとなくしっくりくる情報だけを信じて、大げさに賛同したり、批判したりする人もいる。私自身もこうやって憲法について調べる前は、「九条が変われば戦争が起こる。だから反対だ。」などという単純な考えを持っていた。九条改変イコール戦争というイメージだけで、ただただ憲法改正に反対していた。しかし調べてみると本当に初めて知ることばかりだった。改変されるのは九条だけではないこと、九条の改変が行われても、憲法に記されている「職業選択の自由」などの権利により、必ずしも徴兵制が復活するとは限らないことなど。何も知らずに「反対。」などと言っていた自分が恥ずかしい。自分の国で起きていること、これから起こるかもしれないことなのに、よくわからないなんて本当に恐ろしいことだ。

私たち日本国民、沖縄県民は知らなくてはならない。過去の戦争、国、憲法のこと。そして自分の意見に固執することなく、お互いの意見を尊重しあうべきだ。また、今何が起こっているのか、自分の目で様々な視点から眺め、真実を見極めること。私は現憲法と政府の改正草案を比較することから始めたい。

世界平和への道は程遠いかもしれない。でも間違いなく、未来は私たちの手の中にある。世界中の誰もが、人によつて血を流すことのないような未来になるよう、知ろう、考えよう、そして、言葉を交わそう。